伊能忠敬をめぐる人びと

8

安藤由紀子

坂部貞兵衛

数学を学び暦局に出役
測量17年唯一の犠牲者

文化十年（一八一三年）、六十九歳の伊能忠敬は、最後の九州測量中に、多分初めての「地獄」を経験した。

石腕と頼んでいた副隊長の坂部貞兵衛と長男の景敬を失ったのである。

景敬四十八歳の死は伏せられていたのだが、重病の第一報で忠敬は事実を悟ったらしい。「重病とのこと、まずは難しいものと覚悟しています。この測量の帰りに京都へ着けば、江戸着の日も大体分かるでしょう。（孫たちの）三治郎、鍈之介が生まれていて、大安心です」と書かれている。

御用

五島列島福江島で亡くなった坂部貞兵衛のことを記した手紙には「ご存じの通り測量についてはずっと羽翼だったので、鳥が翼を失ったようなもので、大いに力を落とし、悲しくてなりません。これも天命、致し方ありません。十六日に届けを出し、初七日の法事もいとなみ、墓碑も相応につくりました」とある。老いた忠敬の肩を落とした後ろ姿が、見えるようだ。

内弟子たちが忠敬の長女妙薫にあてた手紙には、この後の島々測量中の忠敬はずっと元気がなく、みんなでいたわり励まし、一カ月後九州本土に上陸してやっと元通りにみんなをしかるようになった、と書かれている。

坂部惟道、通称貞兵衛は、幕府御先手組同心で、数学を学び、選ばれて暦局に出役した。文化二年から十年までの八年間連続して忠敬と行動を共にし、副隊長として支隊を率いた。本隊との連絡の手紙十通余が最近、東京・世田谷の伊能家から発見され、江戸博の「伊能忠敬展」で初公開された。

御用

文化十年の初めころから、忠敬は衰えを感じ、次第に焦るようになったらしい。坂部の責任は重くなり、測量全体を視野に入れながら本隊をカバーするようになった。

筑後川を日田まで測って久留米へ戻る本隊に向かって、坂部は「くれぐれもお急ぎなくゆっくりお測りください。大切な御用向きなのですから、疎略にして、我々を長く持ち、もれのないようにお測りください」と励ましている。

御用

ところが、「大変」なのは忠敬の徴得のみにかかわっては天命にそむくことになります。……無理なことはお止めになり、必ず必ずお急ぎなく……」と、くどいくらいに繰り返し書いている。

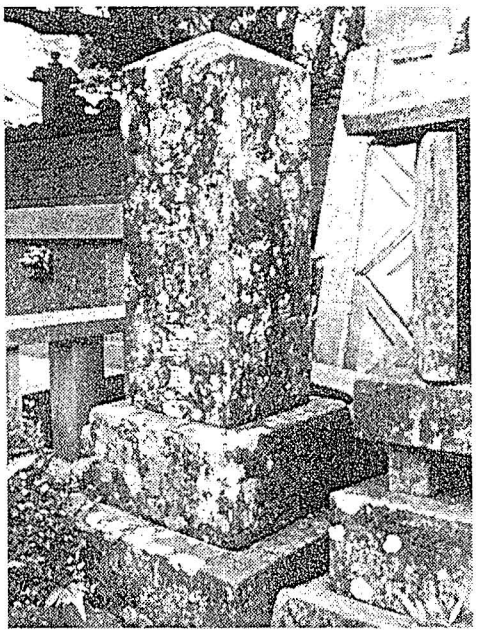
父金時の跡を継いだ高橋景保の書簡も「何事も年老いれば焦るようになるものです。御用ももう今度限り、再測することはできません。御老年で大変でしょうがお心高い縁側をやっと降りて通いました。また寝床の回りを数万の蟻がはい回っています」と訴えている。

この手紙の十数日後、坂部は福江島で亡くなった。チフスらしい。享年四十三歳、墓は福江市の福江川に向かって舌状にせり出した小高い台地にある。そこは死の床を提供してくれた藩の重役、貞方家の墓域である。五島藩は貧しかったのに、医者はもとより祈とうまでして面倒をみてくれたのだった。

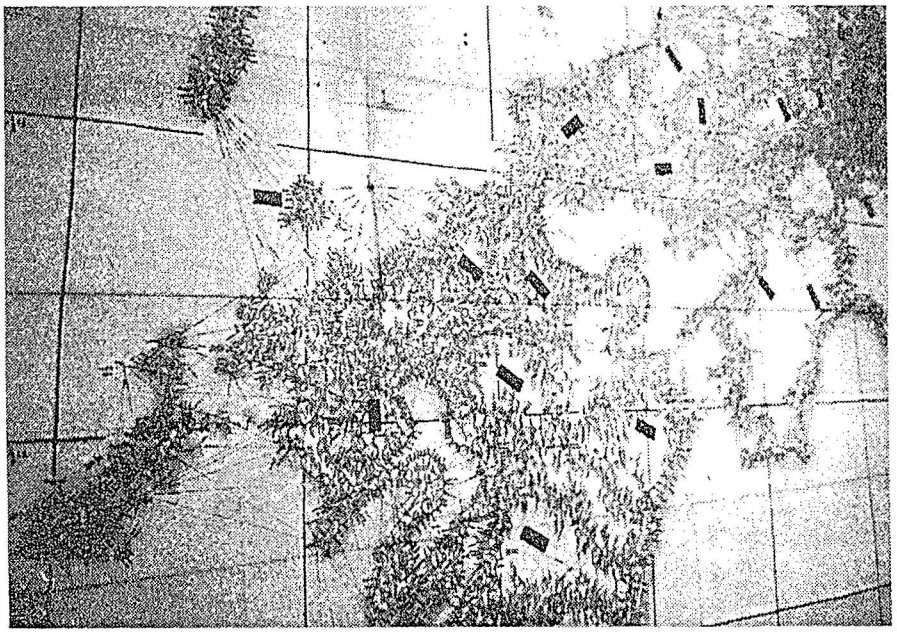
十七年にわたる測量のただ一人の犠牲者であった。

伊能忠敬も坂部貞兵衛も、手紙のなかで「天命」という言葉を使っている。忠敬の日本列島測量という長い重労働を支えたのは、まさにこの言葉であったのだと思う。

（おわり）



坂部貞兵衛の墓／写真提供・佐久間達夫元伊能忠敬記念館館長＝長崎県福江市の宗念寺で



伊能小図（西日本）の複製の一部。原資料は神戸市立博物館所蔵＝佐原市の伊能忠敬記念館で